平成２７年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

<table>
<tr><td>指定期間</td><td colspan="2">ふりがな</td><td colspan="4">とうきょうがくげいだいがくふぞくこくさいちゅうとうきょういくがっこう</td><td colspan="2" rowspan="2">②所在都道府県</td><td colspan="2" rowspan="2">東京都</td></tr>
<tr><td>27～31</td><td colspan="2">①学校名</td><td colspan="4">東京学芸大学附属国際中等教育学校</td></tr>
<tr><td rowspan="3">③対象学科名</td><td colspan="7">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>５年</td><td>６年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="3">中等教育学校後期課程（高等学校）を中心とし、一部については前期課程を含む全校生徒を対象とする</td></tr>
<tr><td>普通科</td><td>109</td><td>116</td><td>122</td><td>126</td><td>130</td><td>124</td><td>727</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>⑥研究開発構想名</td><td colspan="9">多文化共生社会の実現を支える組織力・対話力・実行力の育成</td></tr>
<tr><td>⑦研究開発の概要</td><td colspan="9">「リスク」「葛藤と軋轢」「教育」を大テーマとした課題研究を通して、多文化共生社会の実現を牽引し、現代社会および未来につながる課題解決に主体的に取り組むために必要なコンピテンシー、特に「組織力」「対話力」「実行力」を養い、それを活かしたアクションを起こせる生徒を育成する。
①課題研究および各教科の授業、国際教養群の授業における探究的学習を通して、コンピテンシーの育成と伸長を促すための体系を整備し実践する。学習領域「国際教養」において、生徒の課題研究を現実的な課題に適う高次のレベルに引き上げるための構造的な改変を行う（SGHAct による学校外活動の単位認定・総合的学習の時間の体系化・課題研究を実践につなげる支援企業参加のコンペティションの実施等）。②課題研究の質の向上および課題研究と評価方法策定のための外部連携を強化し、生徒課題研究を中核としてネットワーク化する。③生徒のコンピテンシーを評価するための指標・規準の確立を含む評価方法について、連携大学・企業・国際的組織と共同した研究・開発体制をとる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">⑧研究開発の内容等</td><td>⑧-1全体</td><td colspan="8">⑴ 目的・目標
現実の社会問題に即した焦点からアプローチする課題研究への取組によって、多様化複雑化を極める現代社会の課題に対し、その核心をつかんで組織的に対応できる能力を育成する。また、その研究のプロセス・成果を内部・外部の両者によって評価するシステムを構築し、グローバル・コンピテンシーを定義できる指標の提示を目指す。
⑵ 現状の分析と研究開発の仮説
＊現状の分析
・独自の学習領域「国際教養」が開校当時から設定されており、課題発見-設定-研究というプロセスを学びながら探究的な学習を進めるスタイルを継続的に行っている。
・プレゼンテーションやディスカッションといった発信・表現のスキルを使いながら教科学習を進める授業も多く、授業の多くにアクティブラーニングのスタイルが取り入れられている。
・研究成果を外部に発信し、外部の活動に活かしている生徒もおり、外部からの評価も高い。一方また、社会課題や社会貢献への意識が高い生徒も多く、ボランティアツアーや途上国へのスタディツアーには生徒が自主的に参加している。
＊研究開発の仮説
・課題研究のテーマを概念化して提示することで、生徒の持つ多様な課題意識を焦点化し、現実的課題に結びつけ、机上の空論に終わらないアクションへと結びつける道筋ができる。
・課題研究を通して、他者（学校内外の高校生・大学生・研究者・企業）と連携することで、課題解決に向かうための知識・能力・技術の組織化を図る方法、対話を通して解決の道筋を発見する方法を学び、多様な課題に柔軟に対応できる連合体を構成する能力を養える。また、第 6 学年次の研究を Pre-SGU と位置づけることで、大学での研究への連続・接続が可能である。
・課題研究の過程および成果を世に問い、評価を受けることで、研究の質の向上・現実性の保持が期待される。またグローバル・コンピテンシーを評価するための指標の設定、方法の確立に寄与できる。
⑶ 成果の普及</td></tr>
</table>

		・ホームページによる成果の公表と、課題研究に関連するその他の外国語による表示 ・本校公開研究会での教員側・生徒側両者による公表 ・管理機関及び連携大学・企業との共同による成果発表会 ・生徒運営による国内外の参加者を招いてのシンポジウム・ワークショップの開催
	⑧-2 課題研究	**(1) 課題研究内容** 地球規模の課題解決に付随するテーマとして「リスク」「葛藤と軋轢」「教育」を主軸とし、それぞれに関わる具体的課題を生徒自身が設定・研究する。 ・「リスク」を主軸とした研究は、「リスク社会」に組織で立ち向かえる能力を中心的に育成する。多様なリスクを分析し、それに対応するための複合的「知」のチームをどのように構成するか、またそのチームでどのようにリスクに対応するかを生徒自身が考える課題研究を想定している。「葛藤と軋轢」を主軸とした研究のキーワードは「フォビア（嫌悪）」である。「フォビア」はなぜ生まれるのか、それを超えて他者と対話し、共通の課題に向かうにはどうしたらよいのかということについて課題研究を通して分析・洞察し、合意形成と平和の実現を可能にする対話力に主眼をおいて育成する。「教育」を主軸とした研究は、生徒自身が教育を受けている立場で同世代・次世代の教育に関する課題を考える。身近なところにアプローチの入口があるため、スモールステップではあっても、研究の成果を実行すなわちアクションにつなげることを想定する。 **(2) 実施方法・検証評価** ・後期課程３年間を通じて総合的学習の時間（本校では「国際４～6」）を中心として課題研究を行う。4 年次：「Personal Project」・5 年次：「国際 5-SGH 課題研究」・6 年次・「国際 6-SGH 課題研究」生徒は（SSH・SGH いずれかを選択した上で）個人あるいはチームでの課題研究テーマを三つの主軸のいずれかに関連するものとして設定する。いずれの研究においても最終成果は内部発表にとどまらず、外部評価を受けることを目標とする。研究成果の内、学校外活動については、学校外活動の単位認定制度を導入する（SGHAct の単位認定）。認定に際しては外部機関と連携する。 ・課題研究のための調査・研究の機会としての国内外のフィールドワーク・研修を実施する。 ・課題研究支援および課題研究成果発信の場として、また、外部講師を招いての研究支援の場として生徒をファシリテーターとしたグローバルカフェを開催する。 ・学校設定教科「国際」の６年次開設科目「国際Ａ」「国際Ｂ」における講座「国際協力と社会貢献」「ファシリテーション実践」を開設し、課題研究を通して身に付けたスキルを発展させる。 ・大学との連携事業（東京外国語大学との連携）国際交流基金との連携、企業（CISCO SYSTEMS 等）との連携を通して、課題研究の成果としての実践を行う。 ・検証・評価については、研究の質・成果の達成度・実践化の度合い、またそれらを通して見えるコンピテンシーの獲得・育成状況を観点化し、指標を設けて評価を行う。評価規準・方法は、校内外部機関もその検討・策定に携わることとする。さらに課題研究助成獲得および外部評価の場として、選抜コンペティション<ISS チャレンジ>を実施する。 **(3) 必要となる教育課程の特例等** 特になし。
	⑧-3 上記以外	**(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価** ・「国際教養」を始めとした各授業での「ポスト・アクティブラーニング」の取組 ・英語および英語以外の外国語によるコミュニケーション能力の向上に関する取組 **(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等** 特になし。 **(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の取組内容・実施方法** ・海外ワークキャンプ実施（現地校でのプレゼンテーション・ディスカッション含む） ・大学・高校との交流事業の推進　・後期課程生徒主体の運営組織 SGH Student Team の結成
⑨その他特記事項		本校は平成 26 年度より SSH 事業の指定を受けている。本校の国際教養は「理数探究」「人間理解」「国際理解」の三領域を中核としており、SSH 課題研究は「理数探究」を主軸として運営・実施される。一方 SGH は三つの領域を包括的にとらえ、課題研究は三つの概念によって再構成される。

ふりがな	とうきょうがくげいだいがくふぞくこくさいちゅうとうきょういくがっこう	指定期間	27～31
学校名	東京学芸大学附属国際中等教育学校		

平成２７年度スーパーグローバルハイスクール　目標設定シート

１．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31 年度)
a	自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	300人
	SGH対象生徒以外:	170人	180人	人	人	人	人	人	人
	目標設定の考え方:既に自主的に取り組む生徒は多いが、SGHの取組により明確な目的意識をもって取り組む生徒の増加が期待される。								
b	自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	85人
	SGH対象生徒以外:	40人	50人	人	人	人	人	人	人
	目標設定の考え方:既に海外に赴く生徒は多いが、SGHにより海外の学生との交流が深まり、海外で学ぶハードルがより低いものになることが期待される。								
c	将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	85%
	SGH対象生徒以外:	60%	60%	%	%	%	%	%	%
	目標設定の考え方:既に国際的な仕事を志す生徒は多いが、SGHの取組を通して国際的な仕事の関するイメージがより明確になることが期待される。国内で異文化を受け入れるグローバル人を目指す人もここに含まれる。								
d	公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
	SGH対象生徒:			人	人	人	人	人	30人
	SGH対象生徒以外:	10人	10人	人	人	人	人	人	人
	目標設定の考え方:高い水準の課題研究を通してこれらの大会でさらに成果をあげることが期待される。								
e	卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
	SGH対象生徒:			%	%	%	%	%	75%
	SGH対象生徒以外:	50%	50%	%	%	%	%	%	%
	目標設定の考え方:英語力の向上のためには既に様々な試みを行っているが、SGHで英語での交流の場がさらに多くなり、英語力のさらなる底上げが期待される。								
f	（その他本構想における取組の達成目標）								
	SGH対象生徒:								
	SGH対象生徒以外:								
	目標設定の考え方:								

1’指定4年目以降に検証する成果目標

		25年度	26年度	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	目標値（34年度）
a	国際化に重点を置く大学 へ進学する生徒の割合								
	SGH対象生徒：			%	%	%	%	%	70%
	SGH対象生徒以外：	45%	45%	%	%	%	%	%	%
	目標設定の考え方：本校は既に多くの生徒が国際化に重点を置く大学へ進学しているが、今後国際的な仕事を志す生徒が増加することに伴い、今後増えていくことが期待される。								
b	海外大学へ進学する生徒の人数								
	SGH対象生徒：			人	人	人	人	人	30人
	SGH対象生徒以外：	5人	5人	人	人	人	人	人	人
	目標設定の考え方：グローバルスタンダードを意識した教育実践を行い、今後留学支援制度の充実に伴い、今後海外大学に進学する生徒の増加が期待される。								
c	SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
	SGH対象生徒：			%	%	%	%	%	70%
	SGH対象生徒以外：	－	－	%	%	%	%	%	%
	目標設定の考え方：既に行っている課題研究が生徒に与えるインパクトを考えると、SGHの課題研究は生徒の進路に良好な影響を与えることが期待される。								
d	大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
	SGH対象生徒：			人	人	人	人	人	300 人
	SGH対象生徒以外：	－	－	人	人	人	人	人	人
	目標設定の考え方：仮説1，2の取組、そして卒業生の取組の紹介などを積極的に行うことによって今後増えると考えられる。								

２．グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）

		25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値（ 31年度）
a	課題研究に関する国外の研修参加者数	124人	128人	人	人	人	人	人	150人
	目標設定の考え方：海外研修には毎年5学年のほぼ全員が参加しているが、それ以外の海外研修者を毎年数人ずつ派遣することを計画している。								
b	課題研究に関する国内の研修参加者数	123人	130人	人	人	人	人	人	200人
	目標設定の考え方：理数等の課題研究の一環として国内研修を行っている。それに加え文科系、または文理を融合した課題研究に関する国内研修の機会を増やすことを目指している。								
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	8校	8校	校	校	校	校	校	12校
	目標設定の考え方：本校は海外研修先としてカナダの3高校と1つの大学、さらにニュージーランドに2高校、香港の1高校、英国の1大学と提携している。今後年に約1校づつ連携先を増やしていくことを目指している。								
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	37人	48人	人	人	人	人	人	100人
	目標設定の考え方：学芸大学との高大連携が強まる中、今後人材の交流が活発になることが期待される。また東京外国語大学等他大学と協定を結ぶことによって、今後より多くの人々の参画が期待される。								
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	25人	25人	人	人	人	人	人	100人
	目標設定の考え方：課題研究の専門家との連携を毎年定期的に行っていくことを計画している。								
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	30人	30人	人	人	人	人	人	60人
	目標設定の考え方：課題研究の成果を積極的に外部の大会で発表することを計画している。								
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数（留学生も含む。）	135人	135人	人	人	人	人	人	145人
	目標設定の考え方：本校では帰国生・外国人生徒を毎年一定人数受け入れている。また留学生は毎年1、2名積極的に受け入れている。								
h	先進校としての研究発表回数	2回	2回	回	回	回	回	回	4回
	目標設定の考え方：2年に一度、公開授業研究会を開催していることに加え、来年度からは年一度、各教科ごとで授業公開を行うことを計画している。また研究指定の3年目以降、SGHの研究成果発表も行うことを計画している。								
i	外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている　△一部整備されている　×整備されていない	△	△						○
	目標設定の考え方：整備の人員確保により、ホームページの整備情報が向上することが期待される。								
j	（その他本構想における取組の具体的指標）								
	目標設定の考え方：								

＜調査の概要について＞

1．生徒を対象とした調査について

	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度
全校生徒数（人）	365(全校708)	379（全校727）	390	390	390	390	390
SGH対象生徒数			390	390	390	390	390
SGH対象外生徒数							